

ているくらいでしたから、年貢を軽くするどころか、少しでも多く取ろうとしていました。

年貢をきちんと納めるには、一つぶでも多くの米をとらなければならぬと、与次右衛門は、人にも教え、自分でも先にたつて農業にはげみました。

与次右衛門は、老人の経験や昔からの言い伝えを参考にして、熱心に研究しました。そのおかげで、田畑の手入れはゆきどどき、作物もよく成長していました。与次右衛門は、それを村の人にも、よく教えてやりました。

おりふしに村の作りのよしあしを、見るは司のつとめなるぞや

(そのどきどきに、村の人の作物のできがよいか悪いかを見てやるのは、村のかしらである自分の仕事であろうか。)

耕しのうどきやからに教うるは、村の司のつとめなりけり

(農業のやり方を、あまり知らない人たちに教えるのは、村のかしらで